

# 生産性と簡潔性

坪井 栄治郎

## 1. 使役表現の形式と意味

使役を表す形式はこれまで様々な観点から研究されてきたが、表される使役の意味とそれを表す形式との関係についての研究は最も盛んに行われてきたものの一つと言って良いだろう。中でも、類像性原則に説明原理としての役割を認め、使役の意味タイプ（直接使役/間接使役）と表現形式（語彙的/形態的/迂言的（分析的、統語的））の関係を類像的なものとして捉えて、使役事象と被使役事象の意味的な密接性が使役形態素と動詞の形式面での密接性と類像的に対応するという観点から行われる研究は数多い。これに対して Shibatani and Pardeshi (2002)（以後、S&P (2002) と略記）は、その使役についての包括的な論考の中でそうした類像性原則に依拠した説明法を批判し、使役表現の形式と意味の関係を捉えるにはむしろその生産性に注目すべきであることを主張している。本稿は、この興味深い主張を検討することを通して、使役表現の形式と意味の関係に関連するいくつかの点について考察することを目的とする。

## 2. 使役の意味の "predictor" としての生産性

S&P (2002) は、Comrie (1981)、Haiman (1985)、Dixon (2000) といった、使役表現の形式と意味のあり方に類像性原則の働きを見るアプローチについて以下のように述べている。

"Dixon [...] shows a correlation between the degree of compactness and various semantic parameters, including the directness parameter. With regard to this parameter, he notes that 'the direct value of the parameter is always marked by the more compact mechanism, and the indirect value by the less compact one' (77).

As Dixon (2000:77) notes, his findings agree with Comrie's observation noted above, and with Haiman's (1985) iconicity principle for the correlation between formal distance and conceptual distance." (S&P 2002: 110)

ここで言及されている "Comrie's observation" とは、S&P (2002: 109) の以下の引用を指す。

"Many languages have a formal distinction correlating with this distinction between direct and indirect causatives [read 'causation']. Moreover, the kind of formal distinction found across languages

is identical: the continuum from analytic via morphological to lexical causative correlates with the continuum from less direct to more direct causation." (Comrie 1981: 165)<sup>1</sup>

こうした見解の問題点として、次のように述べられている。

"The problem with these approaches, however, is that the proposed correlations generally obtain only within single languages and that they do not make cross-linguistic predictions. Even within a single language, the suggested correlations may not hold. For example, Dixon considers lexical causatives to be more compact than morphological causatives, hence the former align with direct causation and the latter with indirect causation. If we compare pure lexical causatives in Japanese and productive morphological causatives (the *-sase* forms), the correlation obtains. But we noted earlier that Japanese also has irregular morphological causatives (e.g., *kawak-as-* 'dry (tr.)', *ak-e-* 'open'). According to Dixon's criterion, these tend to be more compact than the *-sase* forms (e.g., *mi-sase-* 'make see', *aruka-se* 'make walk') but less so than lexical causatives.<sup>2</sup> Now, these irregular morphological causatives do not express an intermediate meaning between direct and indirect causation; rather, they align themselves with pure lexical causatives and have the direct causative function." (S&P 2002: 110)

"A purely formal classification like the one Dixon (2000) proposes not only fails to make correct predictions about the form-meaning correlation of certain morphological causatives, but also fails to make cross-linguistic predictions in a straightforward manner. For example, Japanese productive *-sase* forms are morphological and accordingly more compact than periphrastic constructions like the English *make* causatives. But the former are not correlated with a more direct value than the latter—both typically express indirect causation (as well as sociative causation)." (S&P 2002: 111)

つまり、日本語の *kawak-as-* のような非生産的な形態的使役は、簡潔性の観点からは語彙的使役<sup>3</sup>と生産的なサセルによる使役の中間に位置するものとされているにもかかわらず、その表す使役の意味は中間的なものではなく、語彙的使役が典型的に表す直接使役であり、また、生産的なサセルによる使役は形態的使役でありながら、表す使役の意味は英語の迂言的な *make* 使役と変わらないから、一言語内でも通言語的にも、特定の表現形式（語彙的 / 形態的 / 迂言的）が表す使役の意味は一様ではなく、形式と意味の間に対応関係は認められない、という批判である。さらにこれに続けて次のように言う。

"To see this, observe the cross-linguistic patterns of form-meaning correspondence in the semantic map given as Table 4 in the next page.

The overall cross-linguistic form-meaning correlation observed in Table 4 indicates that the notion of productivity is a better predictor than a purely formal criterion. The most telling example is the Amharic data discussed above. The less productive forms (pure lexical causatives and the *a-*morphological forms) express direct causation, whereas the more productive forms (the *as-*

morphological forms and the periphrastic construction with the verb *adarræg* 'to make') correlate with indirect causation. The same is true with Tarascan suffixes *-ku/-ra/-ta*, which have the same formal degree of compactness in causative formation. Cross-linguistically, productive forms align (whether they are morphological or periphrastic) in expressing indirect causation, and lexically restricted forms align (whether they are morphologically unanalyzable or morphologically complex) in expressing direct causation." (S&P 2002: 111-112)

Quechua		
Lexical		- <i>ei</i>
Turkish		
Lexical		- <i>dür/-t</i>
Japanese		
Lexical		- <i>sase</i>
English		
Lexical		<i>make/have</i>
Korean		
Lexical (- <i>i/-hi/-li/-ki</i> )		- <i>key ha-ta</i>
Marathi		
Lexical (- <i>aw</i> )		<i>laav-Ne</i> 'apply' <i>de-Ne</i> 'give'
DIRECT	SOCIATIVE	INDIRECT

(S&P 2002: 112, Table 4)

第4表に見られるのは、結びつく相手を選ばない、生産性の高い使役形態素による使役形式は、それが形態的なものなのか迂言的なものなのかにはかかわらず間接使役を表すが、語彙的使役形式や結びつく動詞の種類に限定のある、生産性の低い使役形式は、それが語彙的なものであるのか形態的なものであるのかにかかわらず直接使役を表す、という通言語的なパターンであり、使役形式の生産性の程度が使役の意味の直接性の程度と相関することを示すものとされる。

### 3. 事象間の時空関係と生産性・類像性

S&Pによれば、前節で見た使役形式の生産性と使役の意味の相関は、以下の理由による。

"One may still want to ask why the observed alignment is between lexical causatives and direct causation and between productive forms and indirect causation rather than the other way around. We believe that this alignment represents an iconic relation between form and meaning, but in a more abstract way than suggested by Haiman (1985). What distinguishes productive morphological causatives and periphrastic constructions from lexically irregular forms is the degree of morphological transparency of the causative element. A higher degree of morphological transparency correlates with a higher degree of separability of elements corresponding to the two event segments constituting a causative situation. Our claim is that this separability of the component elements making up a causative expression correlates with the distinguishability of the causing and the caused event

segments making up a causative situation. In the case of indirect causation, the relevant event segments are distinguishable more clearly, for they tend to have distinct spatiotemporal profiles [...]. In the case of direct causation, however, the two event segments are more tightly integrated, for they share the same spatiotemporal profile [...]." (S&P 2002: 115-116)

つまり、類像性原則の働きは認めるが、それによって結びつけられる形式面としては、形態的かどうかという形態基準によって規定される形式上の密接性ではなく、使役形式の生産性・それが意味する形態的な一体性/分離性であるとされ、さらにそれと類像的に結びつく意味は、使役事象と被使役事象の時空上の一体性/分離性として規定される。

使役の性質を規定するに当たって使役事象と被使役事象の時空上の関係を用いるのは Rappaport Hovav and Levin (2001) の英語の結果構文の分析などにも見られるものだが、それがそのように用いられる理由の一つに、それが具体的な意味内容に踏み込まずともある程度以上客観的な形で使役事象の意味を捉えることを可能にすることがあるように思われる。大きく異なる言語間の事象表現の対照に共通の尺度が必要な通言語的な研究においては、そうした有用性は Rappaport Hovav and Levin (2001) などのように主に単一言語を対象とする研究において以上に大きい。使役の言語化についての通言語的な考察を行おうとする Bohnemeyer et al. (2011) のような研究においても、時間副詞が修飾する上で別個の事象として扱われるかどうかが当該の使役的事象全体の単一性・複合性を判定する基準とされており、使役に対する通言語的な研究である S&P (2002) において事象の性質の規定に事象間の時空関係が用いられるのはその意味では意外なものではない。

#### 4. 生産性と分離可能性

3 節では、生産的な使役形式は使役概念を担う使役形態素と被使役事象を表す動詞とが形態上分離しており、これが使役事象と被使役事象の時空上の分離と類像的に対応するため、生産的な使役形式は（使役事象と被使役事象が時空上分離している）間接使役になり、非生産的な使役形式は（使役事象と被使役事象が一体化している）直接使役になる、という説明を見た。生産性は当該の形式がそれとして同定できることが前提になるので、生産的であればたしかに分析可能であり、分離可能だろうが、生産性を分離可能性と結びつけて考えるのと同じように分離可能性を生産性と一致するものと考えて良いか、その点には議論の余地がある。

上で引用した S&P (2002: 115-116) において、使役形式の構成要素の形態的透明性・分離可能性は生産性に対応した段階性 ("degree of morphological transparency of the causative element") のあるものとされているが、それは必ずしも自明なことではない。上に引用した S&P (2002: 110) 自身が非生産的な *-as* を *kawak-as* のように動詞語幹から分離させた形で示していることに表れているように、*-sase* 同様 *-as* も分離可能であるという点では変わりはない。*-as* の形態的な透明性・分離可能性が *-sase* のそれと異なると言うのであれば、それがどのような意味においてそうであるのかを示す必要がある。標示様式の違いという形態概念で捉えることのできる範囲でしか簡潔性の違いを捉えることができない Comrie (1981) や Dixon (2000) の扱いに対して、生産性に基づく新たな視点を提示しているのが S&P (2002) の優れた点だが、生産性が簡潔性を表す

ことになる論理は必ずしも明らかではない。

さらに、意味的には直接使役とされる *kawak-as* の *-as* が分離可能であるなら、使役の意味の直接性/間接性を使役事象と被使役事象の時空上の一体性/分離性として規定した上で、それが形態上の一体性/分離性と類像的に対応する、という形で使役表現の意味と形式の関係を説明することもできなくなる。3節で引用した S&P (2002: 115-116) で提案されている新たな仕方での類像性原則の適用は、生産性を形態的な分離可能性という、類像性原則によって使役表現の意味と結びつけうる形式面の性質に置き換えることによるわけだが、生産性と分離可能性が対応しないのであれば、生産性は類像性原則によって意味と結びつけられるような形式の簡潔性の指標にはならない。

## 5. タイプ頻度としての生産性

3節で見たように、S&P (2002) は生産性と使役の意味タイプの間にも類像性原則による対応を想定するが、S&P (2002) は形式面での簡潔性と生産性の間にも相関を認め、その理由を、文法化の過程を経ることで形式面で簡素化して語彙化し、意味面で適用範囲が縮小して生産性が失われるため、としている。

"On the other hand, we do see definite correlation between Dixon's (2000) compactness parameter and productivity. Lexically restricted forms tend to be more compact than highly productive constructions. This phenomenon is due to the grammaticalization process, which tends to lead to attrition of form along with semantic bleaching. Thus grammaticalization of causative constructions has the effect of lexicalization of the expressions (from more productive to less productive processes) with concomitant narrowing of the coverage of the semantic domain, and of formal reduction in size."

(S&P 2002: 115)

しかしながら、通常意味の希薄化 (semantic bleaching) によっては意味は一般化して適用範囲が拡張するのであり、意味の希薄化を伴う文法化と生産性の減少を結びつけることには無理があるように思われる。

また、生産性と簡潔性が相関するとしても、文法化によって形式が簡潔なものになる理由は一通りではないので、それを文法化の結果と言うだけではいずれにしても不十分である。豊かな語彙の意味を持った語が意味的に抽象化・一般化して文法的な機能を果たすようになり、文法的な要素の常として使用頻度が高くなって形態面で縮約を受ける場合もあれば、複数要素からなる複合表現が意味的に不透明化して one package 化し、複合性を標示する必要が無くなることによって簡潔化することもある。

使役表現の場合には、独立の語が接辞化し、さらに語幹と融合していく過程の結果であることを考えれば、簡潔性の程度とはその使役形態素の動詞語幹からの独立性の度合いと考えて良いだろう。Bybee (1985) は、規則変化・不規則変化といった、競合する複数の動詞活用パラダイムにおいて、タイプ頻度が高いものほど個々の動詞から自立したパラダイムとしての独立性が高くなることを論じている。同じ議論をここに適用すれば、使役形態素の動詞語幹からの独立性の程

度を決めるのは、そのタイプ頻度、つまり、それが結びつく動詞の数の多さであり、それは S&P (2002) の言う生産性に他ならない。

-as と -sase とはいずれも分離可能な拘束形態素だが、両者のタイプ頻度の間には大きな差があり、そのことが後者の動詞語幹からの独立性を高め、逆に前者の動詞語幹への従属性・一体性を高めている。使役の意味の直接性と類像的に対応する「簡潔性」とは、この心的表示における使役形態素と動詞語幹の association の強さを指すと考えられる。動詞語幹と使役形態素の association の程度自体は密接性を表すものではないが、効力の強弱と効力源からの距離の相関に動機付けられた CLOSENESS IS STRENGTH OF EFFECT という一般的なメタファー<sup>4</sup>によって密接性に写像されると考えられる。

生産性から形態的な分離可能性を導き、それと使役の意味の直接性/間接性の間に類像的な対応関係を見ようとするには上に述べたような問題があるが、生産性のタイプ頻度としての側面を重視し、上に述べたような捉え直しを行えば、使役表現の意味と形式の関係における生産性の役割を説明することが可能になるように思われる。

## 6. 語彙的使役と使役の直接性

ここまで、-as を用いる「乾かす」などの非生産的形態的使役が直接使役を表すことを前提にしてきたが、ここまでの議論に従えば、同じ使役形態素を用いる仲間のある使役動詞の場合、ある程度のタイプ頻度がある分だけ使役形態素の独立性が高くなり、使役事象と被使役事象の密接度の低い使役を表すことになる。S&P (2002: 110) は、-as による使役は純粋な語彙的使役動詞と同じ直接使役を表すとしているが、生産性を使役の直接性の指標と考えるなら、低いものでも生産性が一定程度はある -as による使役が表す使役の意味が純粋な語彙的使役と同じということはないはずである。注3でふれたように、S&P (2002) は個別に学習する必要があるかどうかで線を引き、純粋な語彙的使役と非生産的な形態的使役は等しく直接使役を表すとしているが、それは生産性に基づく自らの立場とは整合しない。

純粋な語彙的使役と非生産的な形態的使役とで表す使役の意味に違いがあるなら、両者が等しく直接使役を表すという前提で行われていた、2節で引用した S&P (2002: 110) の Dixon (2000) に対する批判は成り立たなくなる。その際の批判は、簡潔性の程度が異なる、語彙的使役・-as などによるもののような非生産的な形態的使役・-sase などによるもののような生産的な形態的使役、という三種類の使役形式のうち、簡潔性の程度が中間的である -as による使役などが表すのは使役の直接性の程度において中間的なものではなく直接使役であって、Dixon (2000) などの標示様式の簡潔性に基づく分析が予測することとは異なる、というものだった。しかし、非生産的な形態的使役が表す使役の性質が純粋な語彙的使役が表すものとは異なり、生産的な形態的使役に近いものであれば、Dixon (2000) らの予測が誤りだとは言えないことになる。無論そうであっても、2節で引用した S&P (2002:112) で挙げられていた "Tarascan suffixes -ku/-ra/-ta, which have the same formal degree of compactness" の表す使役の間に意味の違いがあるなら、そのことは Dixon (2000) のような立場にとって問題になることに変わりはない。また、個別学習の必要性を使役の意味タイプとは独立のこととしてしまえば、純粋な語彙的使役と非生産的な形態的使役との間に生産性の程度およびそれに対応する使役の意味の直接性の程度の違いを認めるこ

とは生産性に基づく立場において依然可能である。しかしながら、ここで検討してみたいのは、純粋な語彙的使役と一定程度の生産性のある使役の違いを同じ使役の直接性の程度の違いとして位置づけることの妥当性である。次節ではこの点についてふれる。

## 7. 使役の直接性の性質

Wolff (2003) によれば、直接使役は以下のように定義される：

"Direct causation is present between the causer and the final causee in a causal chain (1) if there are no intermediate entities at the same level of granularity as either the initial causer or final causee, or (2) if any intermediate entities that are present can be construed as an enabling condition rather than an intervening causer. (Wolff 2003: 5)

つまり使役の直接性とは、使役者以外に被使役事象の成立に力を貸すものがあるかどうかに関わる。使役者の使役行為と被使役事象の成立との関係が *immediate* なものかどうか、つまり間に介在するものがないという意味で直接的かどうか、を直感的に捉えているという点で、従来の直接使役・間接使役という名称は適切なものと言えるだろう。一定以上のタイプ頻度があって分析可能なものとして存在している使役形態素の場合、それが表す使役の意味はそれを取る使役動詞グループ内部で等しく適用できるような一般性を持った形で同一に保たれ、動詞語幹が担う被使役部分からの独立性が確立する。<sup>5</sup>使役の直接性とは、そのような使役内部の二つの構成要素のあり方に関わるものである。

これに対して、純粋な語彙的使役動詞はどうであろうか。使役動詞と言えるのは、対応する被使役事象を表す語が意識される場合だろうから、純粋な語彙的使役動詞とは形態的なつながりがないが対応する被使役事象を表す語がある場合ということになる。そのような純粋な語彙的使役動詞の例としては、「死ぬ」に対する補充法的 (*suppletive*) な「殺す」が挙げられることが多いが、しばしば言われるように、殺人にはその行為が社会的に持つ重要性のゆえにそれを表す純粋な語彙的使役動詞が存在する理由がある。他には、Dixon (2000: 39) が補充法の英語の例として *come out/take out* と *lie/lay* を挙げているが、前者は *come* と *take* 自体には形態的に何のつながりもないという点で補充法的ではあるものの、*come* と *take* が多くの連語において自体対応的な対となるものであるために、対応するものとしての結びつきがある程度以上定着していると考えられ、その点で *take out* は純粋な語彙的使役形式と言うより、形態的に分析可能で形態的なつながりのあるものに近いように思われる。*lie/lay* については、*sit/set* や *fall/fell* などと同様、その対応関係はかなりの程度に変則的であり、*-as* のような非生産的ではありながらも意味的な透明度の高い形態的使役とは大きく異なる。そうした特殊性のない、意味的な透明度の高い語彙的使役動詞としては、英語の *break* (vt) のような自他同形動詞が挙げられるだろうが、対応する自動詞 (用法) との関係が形態的にも意味的にも透明<sup>6</sup> だという点で、そうした動詞は分析可能性のある形態的使役動詞に準ずるものと考えうる。

対応する被使役事象を表す語がない場合にまで範囲を広げれば純粋な語彙的使役動詞ということになる動詞は増えるが、そのような動詞の場合、意味内容の中に何らかの変化を引き起こすこ

とを含む点では使役と云う面はあっても、その使役動詞全体の意味において使役部分+被使役部分という分節が形態的なつながりのある使役動詞におけるように卓立した形で必ずしも存在しているわけではない。Goldberg (2010) は、慣習的なフレームに対応するものであれば、かなり多様な関係にある意味要素を含む事象でも、それを一語で表す動詞があり得ることを論じている。

"Verbs that profile two or more non-causally related subevents are somewhat harder to find, yet candidates exist. For example, the cooking term, *blanch*, refers to immersing food, such as tomatoes, briefly in boiling water, then in cold water (in order to remove skin or heighten colour). Meat that is *braised* is first browned by being seared with a small amount of fat, and then cooked in moist heat. [...] If we can imagine some kind of superstitious ritual in which a ball is spun rapidly on a turntable in an oven until the ball bursts (the time until bursting taken to indicate, for example, the length of a pregnancy), then it is not hard to imagine giving a name to this process, e.g. *The guru hotspun the ball*. In fact there is a verb used in pottery-making, *jiggering*, which refers to bringing a shaped tool into contact with clay while the clay is spinning on a pottery wheel." (Goldberg 2010: 45-46)

"Thus verb meanings correspond to semantic frames of predication, which designate generalized, possibly complex states or events that constitute cultural units. The subevents within a semantic frame need not be causally related, and at least occasionally designate both a manner and result. But the subevents must combine to designate a coherent, familiar situation or experience that constitutes a cultural unit." (Goldberg 2010: 51)

分析可能性のない一語の動詞は、様々な制約が課されうる要素の合成を伴わないがゆえに必要なに応じて作られる一種の合切袋であり、その表す意味の中に使役事象が含まれていても、それはひとかたまりとして扱われて使役部分と被使役部分という内的構成は活性化・強化されないまま全体の意味の中に言わば埋没してしまっている。この意味では純粋な語彙的使役動詞が表す意味に含まれる使役部分と被使役部分は一体のものとも言えるが、それはむしろ不分明であることに近く、使役部分と被使役部分とに分節されたものの *immediate* な関係とは別のものだろう。

使役形態素の自立性が高くなるのは、それをを用いる使役動詞のトークン頻度が低く、タイプ頻度が高い場合だが、純粋な語彙的使役動詞はそれとは逆になる。使役の意味を同じ(非生産的)使役形態素を取る仲間の動詞との間で同一に保つ必要がある(非生産的)形態的使役とは異なって、そのような均質化圧力として働く特定の動詞グループへの帰属性のない純粋な語彙的使役動詞の場合、使用事象(usage event)ごとに文脈に依存した意味や形態音韻面での揺らぎが強化されて定着していくのを阻止する動機づけが弱く、使役事象+被使役事象という意味の透明性やそれに対応する形態音韻的透明性が希薄になって分析可能性が失われ、内的な複合性を標示する必要がなくなって単一形態素化する。<sup>7</sup>非生産的なものであっても、ある程度以上の成員からなる動詞群を構成して使役形態素としての自立性を持っている場合、その使役形態素を用いた使役動詞の意味は内的な構成の透明度が高いものでありうるのであり、その点で純粋な語彙的使役動詞

とは性質が異なるように思われる。

## 8. 使役事象の性質と事象の時空関係

前節の議論においては、使役の直接性について Wolff (2003) の定義に従ったが、既に見たように、S&P (2002) は事象の時空関係に基づいて使役の直接性／間接性を規定していた。以下の引用部分ではそのことがさらに明確に述べられている。

"The ultimate defining feature of direct and indirect causation is the spatiotemporal configuration of the entire causative event, rather than the nature of the causee. The notion of direct causation emanates from conceptualization of a causative situation as involving the same spatiotemporal profile for the causing-event segment and the caused-event segment [...]. Indirect causation, on the other hand, refers to conceptualization of a causative situation as involving two relevant sub-events that have two distinct temporal profiles and two potentially distinct spatial profiles [...]. [T]he typical connection between direct causation and a patientive causee and between indirect causation and an agentive causee [...] is basically due to our perception of the world. A patientive object undergoes only a limited kind of change on its own. Many other kinds of change are brought about by the external force directly acting on it. An agentive causee, on the other hand, can bring about an event apart from the causer's direct intervention in the execution of the caused event. It is, however, possible to represent a causative situation as indirect when the caused event with a patientive causee is deemed to have a spatiotemporal profile distinct from that of the causing event. English sentence *John caused the metal to melt* possibly expresses such an indirect causative situation, contrasting it with a direct causative expression such as *John melted the metal*."

(S&P 2002: 90)

しかし、使役行為と被使役事象の成立との間に時間的な断絶 (temporal gap) があっても、それを捨象した概念化をした上で直接使役形式を用いて表現することはたいいの場合可能なように思われる。*John melted the ice* は放置してしばらくたってから溶け始めて水になるような、ジョンの氷の放置と氷が溶け出すまでの間に一定時間の経過がある場合でも使用可能であり、問題になるのは事実関係として時間的な断絶があるかどうかではなく、当該の事象に対する捉え方 (construal) であろう。そしてそれは部分的には参与者の性質をも含めた使役事象全体に関与するものの性質によって決定されるものと思われる。

*John melted the metal* などのような、被使役者が非情物の場合には、時間的な断絶があってもそれを有意義なものと思わずに無視して直接使役形式が使えるのに対して、たとえ命令などの使役行為とほとんど同時に間をおかず被使役者が当該の行為をした場合であっても、被使役者が有情者である場合には同じようには可能ではないが、このことも参与者の性質を考慮することの重要性を示唆する。例えば、いつ言われるのか分からない「立て」という命令にどのくらい素早く反応できるのかをペアで競う競技があったとして、言われた者が反射神経良く命令とほぼ同時に立ち上がった場合であっても、「\*山田が佐藤を立てる前に鈴木が田中を立てた。」とは言えな

い。後述するように、こうした違いは「立つ」という行為の性質によるのであり、それが容認できない理由を考える上で時空関係はあまり助けにならない。

なお、S&P (2002) は表 4 についての注において、語彙的使役形式がない場合には生産的なサセル使役が直接使役を表しうるとしている。

"In all these languages, one type of causative form fills a gap obtaining in another type, such that a productive *sase*-form in Japanese, for example, is recruited to express direct causation, when there is no lexical causative available. In other words, the domain of productive *sase*-form, in reality, extends over to the domain of direct causation." (S&P 2002: 123, note 7)

この注では具体的な例を挙げていないが、Shibatani (1976) は

"When the verbs lack their corresponding lexical forms or when the lexical causatives permit only a limited type of causee, languages in general allow the productive forms to be used to express the situation involving manipulative causation. Japanese shares this property. As noted earlier, the Japanese lexical causative verb *tate-ru* 'stand up' admits only an inanimate causee, while its noncausative counterpart *tat-u* 'stand (up)' admits both animate and inanimate subjects."

(Shibatani 1976: 261-262)

と述べ、「子供を立たせた」という生産的なサセル使役を用いた文が、立つように言って立たせる間接使役の意味だけでなく、直接手を取って立たせる操作使役の意味にもなりうることに注意を促して、これを「立てる」の被使役者が非情物に限られていて「\*子供を立てる」が言えないという語彙の穴を埋めるためとして説明し、そのことは「僕は子供を倒した」のように操作使役を表す非生産的でより簡潔な使役形式が可能な場合にはサセル使役の「僕は子供を倒れさせた」には操作使役の意味がないことから明らかであるとしている。

"The point being made here becomes clearer if (45) is contrasted with a sentence with the productive form that has the corresponding lexical causative form. Unlike (45), (46a), for example, does not allow the manipulative causative reading, as this reading is expressed by the corresponding lexical causative sentence in (46b):

(46) a. *Boku wa kodomo o taore-sase-ta.*

'I made the child fall down.'

b. *Boku wa kodomo o taos-i-ta.*

'I threw down the child.'" (Shibatani 1976: 262)

「偶然の穴を埋めるためなら直接使役形式の代わりに間接使役形式を用いる」という主張はしばしばなされる。例えば、高見 (2012: 86 注 1) の、「花を咲かす／咲かせる」、「野菜を腐らす／腐らせる」などでは、「花／野菜」が無生物であるにもかかわらず、使役形と共起してい

る。しかしこれは、「咲く／腐る」という自動詞に対応する他動詞「\*サケル／\*クセル」が日本語に存在しないため、使役形が他動詞の代用をしているからである…」という主張も同趣旨と思われる。しかし、この高見（2012）の例について言えば、「咲く」などのような、そのものに内在する性質による事象を表す動詞が他動詞用法を持たないのは良く知られているように偶然の穴ではない。対応する他動詞がない場合に自動詞のサセルによる使役がその穴を埋めるべく直接使役を表すのであれば、「走る」などのような典型的な *internally caused* な事象を表す自動詞のサセルによる使役も直接使役を表すことになってしまう。ある動詞が直接使役を表す他動詞用法を持たない場合に生産的な迂言的使役形式がその穴を埋めるというのは、そうした場合以外に限定して初めて意味を持つ主張と思われる。

いずれにせよ、こうした主張の一つの問題は、直接使役を表す構文で用いることができるかどうかはその構文が課す条件や当該の事象の性質自体とは関係のない理由で決まるとしている点である。語彙の穴が本来その部分を表すものではなかったものによって埋められるという現象自体は、例えばある語が何らかの理由で使われなくなったために別の語が意味範囲を広げることでその穴を埋める場合など、珍しいものではないが、ここで問題になっているのは、それぞれ別個の条件を課す二つの構文パターンのうち、個別の動詞について可能なのは片方だけということであり、それは単なる偶然の語彙の穴ではなく、非恣意的で意味的に説明されるべきことである可能性がある。

具体的に見てみると、「\*子供を立てる」が言えないのは、木の棒のような固定形状を持たない人が「立つ」ことは、直立状態になった後も本人が重力に逆らって直立しようとし続けられない限り不可能な、直接使役になり得ない事柄であるためであり、それが言えないのは偶然ではない。なお、「叱りつけて子供を二階に上げ（ておいて自分は茶の間で一人ゆっくりくつろいでいた）」の場合、子供は自分で二階に上がっていくわけだが、「立てる」が直立状態を当人が保つ必要があるのに対して、「上げる」は当人は何もしなくても「上がっている」状態が保たれるという点で異なる。変化を表す動詞の場合には当該の変化をもたらす行為部分を背景化した捉え方をしやすく、「居間に残ってテレビを見続けたがる子供を叱りつけて渋々二階に上がらせた／\*上げた」の対比に見られるように、上がる途中の様態に言及する表現が不可能であることは、子供が自分で二階に上がっていく行為部分を捨棄した捉え方をしていることを示唆する。

「子供を立たせた」が子供の手を取るようにして立たせる *sociative causation* を表しうるのは、S&P（2002）の表4にも示されているとおり、サセル使役はもともと *sociative causation* を表しうるからにすぎない。「子供を立たせた」は、被使役者への直接的な働きかけを伴うものではあっても、依然としてサセル使役が表す「被使役者の介在があってはじめて可能になる被使役事象の成立」と矛盾しない、被使役者の意志に依存して成立する事象を表しており、非生産的な形態的使役で表すことができないからその穴を埋めるべく例外的に可能になっていると考える必要はない。

「立てる」とは違って「着せる」は、意識不明で倒れている者に服を着せるような直接使役の場合だけでなく、手伝って着せる *sociative causation* 的状況でも使用可能だが、そのような「着せる」があっても「（押さえつけるようにしてなんとか）嫌がる子供に服を着させた」のようにサセル使役で *sociative causation* を表すことは（それぞれの使役の直接性は異なるであろうが）

可能である。直接使役・操作使役を表す形式の有無はサセル使役が表す使役の意味タイプとは基本的に独立のことであり、「子供を立たせた」が立つよう言って立たせる間接使役だけでなく操作使役も表すとしても、そのことは必ずしも「\*子供を立てる」が言えないことが偶然の語彙の穴であることを意味しない。

「着せる」と「着させる」のように、使役の直接性の尺度上で中間的な操作使役的状况に対してサセル使役形式も非生産的な形態の使役形式も用いることができるのは、そうした状況が被使役者の行為の自発性について曖昧な解釈を許すことによる。被使役者を自らの意思によって行為する者として見なさずに人形に服を着せるような一方的な直接使役事象のように捉えれば「着せる」で表すことが可能になり、被使役者の意志行使が使役行為と被使役事象の実現の間に介在するものとして捉えれば「着させる」で語る事が可能になる。「子供を倒れさせた」が「子供に服を着させた」や「子供を立たせた」と違って操作使役の意味にならないのは、倒れるのがほぼ一瞬で終了してしまい、倒れる者が倒れていく過程に手を出して操作するということが考えづらいため、サセル使役が表しうる意味として可能なのは倒れるように仕組む・倒れる条件を整えるという間接使役に限られるからであろう。「立つ」に人を被使役者とする非サセル使役形式がないのは「走る」に人を被使役者とする非サセル使役形式がないのと同じ理由による。

上に引用した S&P (2002: 90) で "The ultimate defining feature of direct and indirect causation" is the spatiotemporal configuration of the entire causative event, rather than the nature of the causee." とされていたが、このように見てくれば、使役における形式と意味の関係を考える上で重要なのは、表現対象となる使役事象全体の捉え方を部分的に決定する参加者の性質・関係であって、使役事象と被使役事象の時空関係はむしろそのようにして決まる使役事象全体の捉え方の一部であり、原因というよりは結果であろう。事象間の時空関係は分析の切り口としては便利なものではあるが、Rappaport Hovav and Levin (2011) では使役事象の性質自体の複雑さが自他交替に影響する度合いの高さ（そしてそれに連動して狭い意味での語彙意味論の枠内に収まらない側面が多いこと）に対する認識が高まっているように思われるのは興味深い。

## 注

- 1) S&P (2002) は "Comrie (1981: 172)" としているが、1981 年は初版の発行年、172 ページは第 2 版での該当部分の掲載箇所なので、ここでは初版にそろえて引用する。
- 2) 引用した S&P (2002: 110) で、日本語の *-as* による非生産的な形態の使役について "According to Dixon's criterion, these tend to be more compact than the *-sase* forms" としているのは、Dixon (2000: 75) が "a shorter affix is more compact than a longer one" としていることを受けていると思われる。
- 3) 「語彙的使役 ("lexical causative")」という言葉は S&P (2002: 111) では "forms that need to be learned individually (because of irregularity in form)" を指して使われ、語彙的使役には非生産的な形態の使役が含まれるが、ここでは特に誤解のない場合には通常の形式的な基準による意味で用いる。通常の意味での語彙的使役動詞を特に限定して指す際の S&P (2002) の "pure lexical causative" にならって「純粋な語彙的使役」という言葉も適宜併用する。
- 4) Lakoff and Johnson (1980: 128-132) の *Who are the men closest to Khomeini? = Who are the men who have the strongest effect on Khomeini?* などについての議論参照。
- 5) 実際には個別事例ごとに他の様々な要因が関与するだろうと思われる。例えば韓国語の *-i/-hi/-li/-ki* による使役形式には様々な程度の意味的な不透明化・語彙化が見られるようだが、その理由として、

代わりを担う意味的に透明な迂言的使役形式の発達のために語彙化を抑制する動機づけが弱められている可能性や、*-i/-hi/-li/-ki* が受身的意味も担うものであることがその使役機能に影響を与えている可能性などを考慮する必要があると考えられる。

- 6) 表す事柄の性質の反映として「世界記録を破る・世界記録が\*破れる / 破られる」のように自他対応しない場合はあるが、それは意味の透明性とは独立の事柄である。
- 7) トークン頻度の高さも形態の縮約を促すように働く。Haspelmath (2008) は、従来 iconicity という概念がともすればその内容が曖昧なままに様々な現象の説明に当てられてきたことを批判的に検討し、iconicity of quantity, iconicity of complexity, iconicity of cohesion の現れとして説明されてきた現象はむしろ経済性原則の表れであって、形式面での簡潔性は使用頻度の高さによる縮約として説明されるべきことを主張する。そこで行われている議論の中には再検討すべき問題を含むものがあると思われるが、ここでは、使用頻度の高さによる形式の縮約は内的な複合性のないものにも生じる一般的な現象であるが、使役形式の場合にはまず内的複合性が失われる段階を認めるべきであり、そこには類像性原則の働きが認められることを言うだけにとどめ、より詳しくは稿を改めて論じることとしたい。

## 参考文献

- Bohnmeyer, Jürgen, N.J. Enfield, James Essegbey, and Sotaro Kita. 2011. "The macro-event property." *Event Representation in Language and Cognition*, Jürgen Bohnmeyer and Eric Pederson (eds.), 134-165. New York: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology*. Amsterdam: John Benjamins.
- Comrie, Barnard. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Blackwell.
- Dixon, R.M.W. 2000. "A typology of causatives: form, syntax and meaning." In Dixon and Aikhenvald (2000), 30-83.
- Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald. 2000. *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldberg, Adelle. E. 2010. "Verbs, constructions, and semantic frames." *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, Malka Rappaport Hovav, Edit Doron and Ivy Sichel (eds.), 39-58. Oxford: Oxford University Press.
- Haiman, John. 1985. *Natural Syntax: Iconicity and Erosion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. 2008. "Frequency vs. iconicity in explaining grammatical asymmetries." *Cognitive Linguistics* 19: 1-33.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2001. "An event structure account of English resultatives." *Language* 77: 765-797.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2011. "Lexicon Uniformity and the causative alternation." Martin Everaert, Marijana Marelj, and Tal Siloni (eds.), *The Theta System: Argument Structure at the Interface*, 150-176. Oxford: Oxford University Press.
- Rice, Keren. 2000. "Voice and valency in the Athapaskan family." In Dixon and Aikhenvald (2000), 145-235.
- Shibatani, Masayoshi. 1976. "Causativization." *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, Shibatani Masayoshi (ed.), 239-294. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi and Paradeshi, Prashant. 2002. "The causative continuum." *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, Masayoshi Shibatani (ed.), 595-649. Amsterdam: John Benjamins.
- 高見健一. 2012. 「使役構文をめぐる」, 澤田治美編『ひつじ意味論講座2 構文と意味』, 69-87. ひつじ書房.
- Wolff, Phillip. 2003. "Direct causation in the linguistic coding and individuation of causal events." *Cognition* 88: 1-48.